

宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

平泉藤原氏と京都・鎌倉

岡田清一

ご紹介いただきました岡田と申します。本日は、「平泉藤原氏と京都・鎌倉」というテーマでお話をさせていただけます。具体的には①「都市「平泉」（柳之御所遺跡）の変遷を読み解く〜奥羽・平泉藤原氏と京都の関係性」、②「出土資料「折敷墨書（下賜給絹日記）」を読み解く〜平泉藤原氏の領域支配と鎌倉・源頼朝」に分けたいと思います。

藤原氏が平泉に本拠を構えるのは、『吾妻鏡』一〇八九（文治五）年九月二十三日条に（清衡は）継父武貞が亡くなった後、奥六郡を伝領し、去る康保年中、江刺郡豊田館を岩井郡平泉に移して宿館とし、三十三年を経て亡くなったとあることを根拠に、康保年中（九六四〜六八）は明らかな誤りであるものの、嘉保（一〇九四〜九六）あるいは康和（一〇九九〜一一〇三年）が考えられています。また、一一八九（文治五）年九月、源頼朝によって四代藤原泰衡が滅ぼされますので、このわずか九十年が東北の歴史に大きな影響を与えた藤原氏の時代であり、とき

に「平泉の時代」と称されることもあります。

この「平泉」研究は、一九八八（昭和六三）年から始まった「柳之御所」遺跡の発掘調査が大きなきっかけとなりました。多くの遺構・遺物が確認されると同遺跡の重要性が再認識され、保存運動が展開されるなかで、一九九一（平成二）年七月には遺跡の埋め戻しが決定、実施され、一九九七年三月、同遺跡は「柳之御所・平泉遺跡群」として国史跡に指定されるにいたりました。なお、二〇一一（平成二三）年六月、世界遺産に登録された「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群—」に「柳之御所遺跡」は含まれませんでした。

一、都市「平泉」（柳之御所遺跡）の変遷を読み解く

（一）平泉の変遷

平泉藤原氏の時代九十年のなかで、「平泉」はどのように変わっていったのでしょうか。

とくに「柳之御所」遺跡の変遷については、

- ① 十二世紀第1四半期～第2四半期（一一〇〇年前後～一一四〇年代）
- ② 十二世紀第2四半期後半～第3四半期頃（一一四〇年代～一一六〇年代）
- ③ 十二世紀第3四半期以降～十二世紀末（一一七〇年頃～一一八九年）

と大きく三時期に区分され、ほぼ清衡・基衡・秀衡の時期に対応するといっていよいでしょう。したがって、各時期における特徴は、平泉藤原氏三代の実態と関連あるいは反映されていると理解されています。

この三区分された同遺跡を中心とした「都市平泉」について、本日は前川佳代さんの復元図（平泉の都市プラン

「変遷と史的意義」『寧楽史苑』四五・二〇〇〇）を使用させていただき、これまでの発掘調査をもとにした近年の成果を加味して、その特徴等についてまとめておきたいと思います。

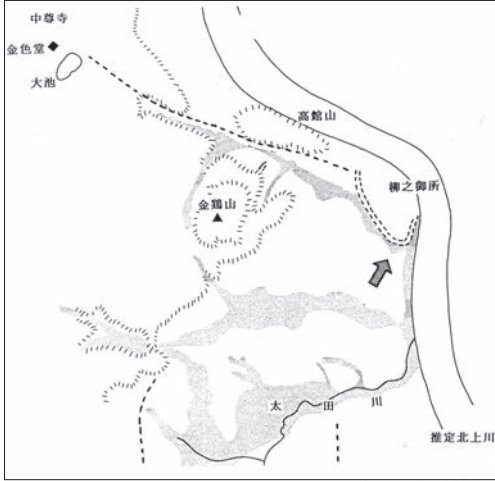
「柳之御所」遺跡の特徴は、東に北上川が南流し、北・西から南にかけて大きな堀が巡らされていることにあります。当初は、遺跡北西側に大きな溝が築かれ、その内側に四十メートル四方の約千六百平方メートルが中心域をなし、大型建物などの遺構が確認されているものの、遺構密度は薄いこと、遺物の出土量も少なく、「かわらけ」も輻輳使用であったこと、その後、溝は埋め戻され、遺跡を囲むように幅五〜八メートルの堀が構築されたとの指摘もあります（櫻井友梓「造営期の柳之御所遺跡―平泉における政治拠点造営の検討（1）―」『岩手大学平泉文化研究センター年報』一〇・二〇二二）。

この堀に囲まれた内部が、のちに「平泉館」と呼ばれる藤原氏の中心施設になっていくわけですが、遺跡からは十二世紀初頭の「かわらけ」がたくさん出土しており、柳之御所は十二世紀初頭、すなわち清衡の時代に構築されたことは紛れもないことなのでしょう。

柳之御所の近く「金鶏山」麓に花立遺跡（花立廃寺）から大量に出土した瓦も十二世紀第一四半期のもの、要するに一二三〇年以前と確認され、さらに十二世紀の四面庇の大型建物遺構も確認されています。さらに窯跡からは、十二世紀第一四半期の渥美系陶器が確認されています。

また、一九八三年には、宮城県石巻市の北上川河口に残る水沼窯から十二世紀第一四半期と考えられる渥美系の三筋袈裟襷文壺や甕、播鉢、椀が出土しています（『水沼窯跡発掘調査報告』一九八四）。その水沼窯製品が平泉でも確認されており、北上川を往来する舟運の存在も推測されます。しかも、平泉遺跡群からは、渥美系あるいは常滑系の大型甕がたくさん確認されており、太平洋岸の船を用いた搬送が行われていたことは確実といって良いと思います。

ところで、前川さんは、清衡が古代衣川関であった要害な地に居を構え、中尊寺を建立して柳之御所遺跡周辺を開発の対象としたと指摘していますが、清衡が平泉に移った（一〇九九ないし一〇九五）後、最初院多宝寺（中尊寺）が建立されたのが一一〇五（長治二）年であったことを考えると、羽柴直人さんが指摘するように居館（柳之御所）造営後、その正面に金色堂が造られたと考えていいと思います（『都市平泉の成立と展開』『平泉を掘る』二〇二〇・吉川弘文館）。



清衡期の平泉推定図 *前川(2000)から転載

(二) 清衡と中尊寺

なお、清衡について『尊卑文脈』には「陸奥国押領使・奥御館と称された」とあります。一方で、一〇九一（寛治五）年、清衡が関白藤原師実（馬二匹を献上した際、「後二条師通記」（師実の子師通の日記）には「陸奥住人清衡」とあり、あるいは「紺紙金銀字交書一切経」（一一一七（永久五）年）の奥書には「大檀那散位藤原清衡」、中尊寺が完成したときの供養願文（一一二六（大治元）年）にも、「正六位上藤原朝臣清衡」とあるのみで、恐らく無官だった（散位）ものと思われれます。但し、死亡記事が『中右記』に記載されるなど、京都朝廷内にその存在は熟知されていたことは確かです。

そうした立場の清衡と、京都朝廷との関係は必ずしも良好なものでなかったことは、『中右記』一〇九二（寛治六）年六月三日条には、陸奥守藤原基家が「清衡が合戦を企てている」と朝廷に報告したことを載せ、翌年には平師妙が出羽国司（藤原信明）を襲撃する事件が起きており、奥羽では在地勢力と朝廷、国衙とのあいだに何らかの緊張関係が生じていたことが考えられます。『中右記』一〇九六（永長）元年十二月十五日条に「朝廷の蔵人所の砂金が非常に不足している」とありますが、恐らく、清衡と陸奥守との対立関係が前提となって陸奥守は砂金を朝廷に納めることができなかつたとも考えられます。さらに、後世の史料ですが、『古事談』には、「清衡は王地を押領する謀反人」と、大納言源俊明が言った」とあります。このような状況を払拭するため、清衡は撰関家や院に近付いたと考えることができます。

清衡の撰関家への貢馬は、平泉に移る前の一〇九一（寛治五）年が最初です。それ以前、「奥州後三年記」によれば、後三年合戦で源義家が陸奥守として下向したとき、清原真衡は義家を三日間にわたって饗応し、立派な馬を毎日五十匹のほか、多くの砂金やワシの羽根、アザラシ、絹布の類いを贈ったといっています。こうした北方の産物を

入手できる交易システムは、清原氏の時代、あるいは安倍氏の時代までさかのぼって機能していたと思われ、清衡は安倍氏や清原氏の北方交易システムを継承し、砂金やアザラシを手に入れたのです。

おそらく、清衡の祖父（母方）安倍頼時は「奥六箇郡の司」（陸奥話記）、さらに母が再嫁した清原武貞は「山北三郡俘囚主」であったことなどから、安倍・清原両氏が滅亡すると、それらの立場は清衡に継承されたと考えられます。北方交易のシステムも当然含まれていたと理解できます。

『中右記』一一二〇（保安元）年六月十七日条には「撰関家（藤原）忠実の御厩舎人兼友と越後国小泉庄の前定使兼元の二人が、清衡の砂金や馬、檀紙を奪った」と清衡の使者が訴えた」とあります。つまり、清衡は馬だけではなく、砂金や檀紙も贈ることができたわけです。「清衡が撰関家に馬を貢いだ」という史料から、「馬だけ」と思っています。しかしがちですが、砂金や奥羽の特産物も含まれていた可能性は多分にあると理解できるでしょう。

こうした奥羽ばかりかさらに以北の特産物を活用し、清衡は撰関県を含む京都朝廷の政界と結び付いたことは確実です。そうした関係を具体的に解明した野口実さんの研究によれば、撰関家は寄進された島津庄を支配して私貿易の拠点とし、夜光貝や檳榔などを入手したといえます（列島ネットワークと人脈）『東国武士と京都』二〇一五・同成社、「法住寺殿と小松家の武將たち」京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』一五・二〇〇二。周知のように、夜光貝は、中尊寺金色堂に大量に使用された螺鈿細工の原材料ともなりました。そうした建築資材の一部が撰関家を介して平泉にもたらされたかと理解できます。その見返りとして砂金を入手した撰関家は、これを対外交易に用いたとの指摘もあります。

なお、大量の夜光貝から螺鈿に用いる部分を削り出したとすれば、その作業はどこで行われたのかは解明されていません。平泉周辺にその痕跡は見つかっておらず、その高度な技術からすれば、あるいは京都周辺で加工され、

平泉に搬送されたものとも思われます。

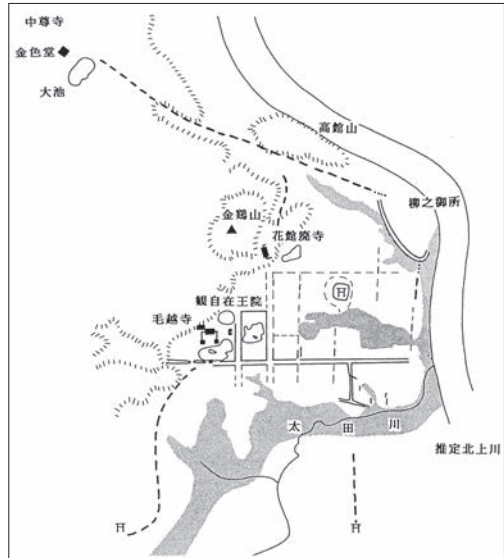
また、南島の檳榔や赤木は、必ずしも島津庄だけではなく、大宰府や肥前国府などからも京都に搬送されたことが『中右記』に散見されます。おそらく、多様なルートで南島の産物が摂関家ばかりか多くの有力貴族のもとにもたらされたのでしょう。

(三) 基衡・秀衡と平泉

清衡については中尊寺ばかりが特筆され、「柳之御所」や「花館」周辺との関連は考えられても、平泉という「都市」との関わりは明らかではありません。おそらく、多くの識者が指摘するように、基衡によって平泉は都市として発展したと理解できます。

基衡の時代になると、平泉の西方、金鶏山南の志羅山地区に毛越寺が建立され、その南には東西の道路とそれに直交する南北の道が整備され（方形区画の整備）、のちに観自在王院も配置されるような町づくりが進められます。丈尺制を導入し、京・白河に類似した都市という観念が導入されたといえます（前川前掲「平泉の都市プラン」）。

毛越寺の建立についても同時代史料はありませんが、『吾妻鏡』一一八九（文治五）年条に載る「寺塔已下注文」は貴重で、堂塔四十余宇、禅房五百余宇からなる大伽藍であったようです。創建時期は明らかではありませんが、「寺塔已下注文」には「関白忠通が額を認め、参議教長が色紙形を書いた」とあります。また、「楽所補任」には、左近府生の三宅則友について一一四七（久安三）年五月ごろ陸奥に下向し、未だ帰ってないとあり、さらに右近府生の伯成正は、一一四四（天養元）年四月ごろ陸奥に下向し、一一四八（久安四）年に帰った」とあります（入間田宣夫『藤原秀衡』二〇一六・ミネルヴァ書房）。毛越寺が建立された際には落慶供養会が行われたはずですが、この二人



基衡期の「平泉」

はそうした法会に関与したのでしよう。とくに狛成正は一一四八年に帰洛したのは法会が終わったためであり、一四七年には三宅則友が陸奥に下向していますから、同年あるいは一一四八年頃に落慶供養会が行われたとも理解でき、毛越寺の建立期間もその頃と考えられます。

毛越寺の伽藍配置などから、「法成寺や法勝寺のプラン」(前川佳代「庭園文化にみる京都と平泉」京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』三二・二〇一八/杉本宏「京都の瓦・平泉の瓦」『瓦から見た平泉文化』二〇〇〇・平泉町教育委員会)とか、「御室地域の仁和寺のプラン」(前川前掲「庭園文化にみる京都と平泉」)が応用されたと指摘されています。仁和寺の周辺に存在した円宗寺、円教寺、円乗寺、円融寺という、「円」の名が付く寺の存在から、毛越寺Ⅱ「円隆寺」とい

う名称が生まれた可能性も示されています。

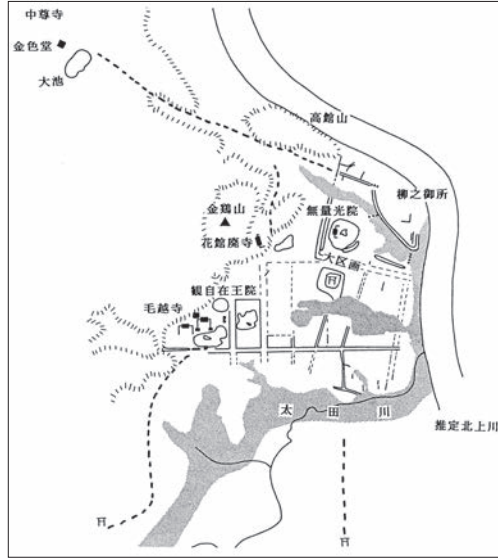
基衡時代の後半になると、都市域がさらに広がります。そのきっかけは一一四三（康治二）年四月、藤原基成が陸奥守兼鎮守府將軍に就いて赴任したことが考えられます（羽柴前掲「都市平泉の成立と展開」）。後に、基成の娘は秀衡と結婚し泰衡が誕生します。

秀衡の時代、平泉の「都市」域はさらに拡大し、充実していきます。その最大のできごととは、大規模な土塁に囲繞された無量光院が建立され、柳之御所とのあいだには橋が架けられ、さらに北上川に向かう橋も確認できます。北上川の水運を考慮した、川湊への連絡路ともいわれます。

さらに政治・儀礼の場としての「平泉館」、秀衡の居所「伽羅御所」、祈りの場としての御堂Ⅱ無量光院という三点セットが整備されます。それは、京都における後白河院の拠点でもある法住寺南殿（政庁・儀礼用施設）、上御所・下御所・新御所（居住施設）、蓮華王院・最勝光院Ⅱ御堂（信仰施設）群をモデルにしたことが指摘されています（川本重雄「院政期の内裏・大内裏と院御所」二〇〇六・文理閣／羽柴「平泉の道路と都市構造の変遷」『平泉の世界』二〇〇二・高志書院）。秀衡期には、東に新日吉社、南に祇園社、西に北野天神、北に新熊野社という四方鎮守が置かれますが、後白河院によって新日吉社や新熊野社が勧請されて成立するのは、一一六〇（永暦元）年のことです。秀衡期の平泉が、後白河院の法住寺殿を模倣したとの指摘は、まさにそのとおりだと思います。

ただし、六波羅地区を模倣したとの可能性もすてきません。それは、柳之御所から中尊寺に至る大道にそって、居宅が確認されていることです。『吾妻鏡』は秀衡の長男国衡が「西木戸太郎」と記されており、そこに住んでいた可能性もあります。それは、六波羅地区に平清盛の一族の多くが屋敷を持って集住しており（泉殿・池殿・小松殿）、さらに八条院や後白河院、平家に伺候する手工業者の集住する七条町が、六波羅地区に隣接しているという

野口さんの指摘は、北上川という水運を有する柳之御所との類似性も考えられます（『京都七条町の中世的展開』『京都文化博物館（仮称）研究紀要』一・一九八八）。



秀衡期の「平泉」



柳之御所遺跡 昭和63年12月（岡田撮影）

二二：「折敷墨書銘（下賜給絹日記）」を読み解く

藤原氏は京都とも多様で複層的なつながりがあったことが確認され、まさに「平泉の時代」を迎えることになり
ます。ところが、その平泉は頼朝によってあっけなく滅ぼされます。その背景の一端を、「折敷墨書銘（下賜給絹日記）」

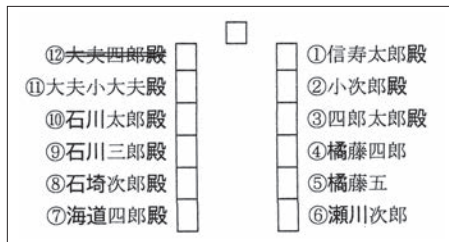
から読み解きたいと思います。なお、これまで「人々給絹日記」と読んでおりましたが、鍛代敏雄さんの指摘のよ
うに「くハし給」⇨「下賜給」と読みたいたと思います（「柳之御所遺跡出土の折敷墨書を読み直す」『東北福祉大学芹沢録介
美術工芸館年報』二〇・二〇一九）。



折敷墨書銘 (下賜給絹日記)

八重樫忠郎氏 (平泉世界遺産ガイドセンター長) 提供

くハし給絹日記	
⑧ 石埼次郎殿	赤根染綾一 水干袴
⑦ 海道四郎殿	赤根染綾一 カリキヌハカマ
⑥ 瀬川次郎	赤根染綾一 カリキヌハカマ
⑤ 橋藤五	赤根染 ウヘー カリキヌハカマ
④ 橋藤四郎	赤根染白 アヲハカマ (目懸)
③ 四郎太郎殿	赤根染白 カサ子タリ カリキヌ
② 小次郎殿	赤根染白 カサ子タリ カリキヌハカマ
① 信壽太郎殿	赤根染青 カサ子タリ
⑨ 石川三郎殿	赤根一 カサ子
⑩ 石川太郎殿	紺大目結一 ⑫ 末末郎殿紺大目結
	⑪ 大夫小大夫殿紺大目結



墨書に記載された人々の席次

この墨書に記載された十二人は、何らかの「宴席」に参加した名簿のようなのと考えられます。しかもこの折
敷は、一一五八年+X年という伐採時期が年輪年代測定法によって確認されています。入間田宣夫さんは、一一七
〇（嘉応二）年、秀衡が鎮守府將軍に就いた事に関する「宴」の可能性を指摘しています（「折敷墨書を読む」『奥州
藤原氏と柳之御所跡』一九九二・吉川弘文館）。その当否はしばらく措きますが、この十二人は、「殿」記載や苗字の有
無によって、i 名前+「殿」付の①②③⑪⑫、ii 苗字+「殿」の⑦⑧⑨⑩、iii 苗字のみの④⑤⑥に三区分別、後

述しますように、iiiが藤原氏の郎従クラスと考えられます。ところが、その記載はi・ii・iiiの順ではなく、中ごろにiiiが記載されていますので、iiiが末席とするような席次を想定すべきかと思えます。

その結果、①信寿太郎殿、②小次郎殿、③四郎太郎殿、④橘藤四郎、⑤橘藤五、⑥瀬川次郎、⑦海道四郎殿、⑧岩崎次郎殿、⑨石川三郎殿、⑩石川太郎殿、⑪大夫小大夫殿、⑫大夫四郎殿の順に、しかも前掲図のような席次が考えられるでしょう。なお、⑫は抹消されていますが、途中退席と思えます。

問題は、i・iiの**人びと**が一堂に会していることです。すでに野口実さんも指摘されるように、⑦海道は福島県太平洋岸の通称。⑧岩崎は岩崎郡（いわき市の旧郡名）、⑨⑩石川は石川庄（福島県石川町）に由来します。また、iiiに分類される④⑤は、『吾妻鏡』文治五年九月十四日条に載る「奥州住人の豊前介実俊・弟の橘藤五実昌」とある実俊・実昌に比定され、奥羽両国の民部省図帳や大田文などに精通した平泉藤原氏の事務系官僚でありました。恐らく、⑥も同類だったと思われれます（『平安期における奥羽諸勢力と鎮守府將軍』『古代世界の諸相』一九九三・晃洋書房）。

では、ここから何を読み取るかです。当時の主従関係については、すでに石井進さんが、命令には絶対的に服する代々仕える家人けにんと、去就向背の権利を有し、ゆるやかな主従関係のもとにあった家礼かれいとに二分されています（鎌倉幕府論『岩波講座 日本の歴史5』一九七五）。

これを平泉藤原氏に当てはめると、『吾妻鏡』に「郎従」と記載される秋田致文・由利八郎は、それぞれ秋田県域の秋田郡・由利郡が苗字の地と思われ、河田次郎は同じく比内郡贄柵で泰衡を謀殺していますから、同郡が根拠地と考えられます。大河兼任は「河北・大潟」＝現在の男鹿半島を根拠にしました。また、田河行文は、山形県田川郡（鶴岡市）を苗字の地としました。さらに、信夫佐藤庄司（信夫大庄司季春）は、福島県信夫郡（福島市）を苗字の地とし、『十訓抄』に「代々伝われる後見なるうえ、乳子なり」と記されています。

以上の人びとは、『吾妻鏡』などに「泰衡の郎従」とか「重代の郎従」と記され、平泉藤原氏に荷担して討死し、あるいは捕縛された人びとでした。また、進攻した頼朝軍と、石那坂（福島市南）で戦った信夫佐藤庄司の叔父河辺高経・伊賀良目高重や阿津賀志山（福島県北部）で戦った金剛別当秀綱・下須房太郎秀方、さらに栗原三迫（宮城県北部）で戦った若九郎大夫（若手県和賀郡）・余平六なども「郎従」と考えても良いと思います。

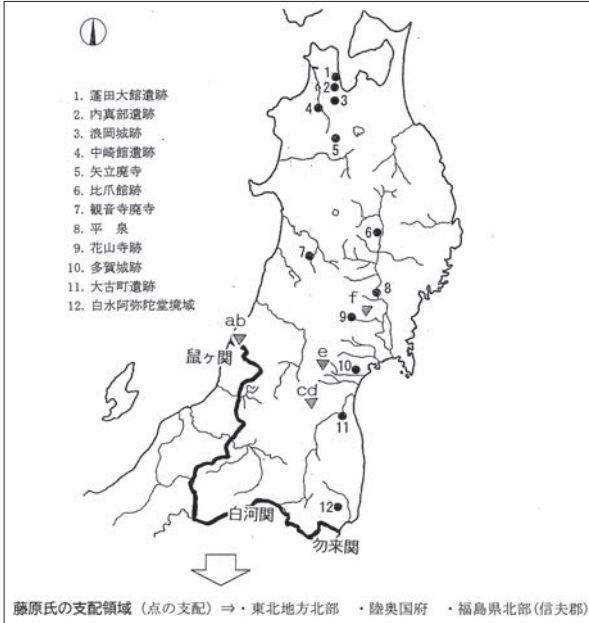
ところが、「下賜給絹日記」にも載っていた石川太郎、石川三郎を含む石川氏は、平泉方に付いて頼朝に殺害された一族と、頼朝方に付いて御家人として存続する一族とに去就を異にしています。また、「下賜給絹日記」に載る「石崎次郎殿」⇨岩崎氏は、後述するように、同族岩城氏とともに頼朝勢の先駆けとして平泉を攻撃することが確認されています（『吾妻鏡』）。このように見てくると、「下賜給絹日記」に載った「殿+苗字」の人びとは、必ずしも藤原氏に同調して頼朝軍と対峙したわけではなく、どちらかといえば頼朝方に同調して平泉攻撃に荷担したといっても良いと思います。

このように、「下賜給絹日記」には必ずしも藤原氏の支配に組み込まれたとは断定できない人びとが載っていることとなります。さらに、「郎従」と記された被官の多くは東北地方の北部に片寄っており、南部の信夫佐藤氏のような存在は極めて少ない、あるいは例外的な存在であったといえるのかもしれませんが（岡田清一「奥州藤原氏の奥羽支配」『政治経済史学』三四八・一九九五、『鎌倉幕府と東国』続群書類従完成会・二〇〇六）。

ところで、考古学上では、手づくねかわらけ、輸入磁器、国産陶器という三点（平泉セット）が確認される遺跡は、平泉（藤原氏）との関係が強いところといわれます。現在、平泉は当然としても、「平泉セット」が確認された遺跡の多くは北東北に位置し、南東北では福島県の白水阿弥陀堂境域を例外として、宮城県丸森町の大古町遺跡および多賀城跡が確認されるにすぎません（八重樫忠郎「平泉藤原氏の支配領域」『平泉の世界』二〇〇二・高志書院、『平

泉の考古学」二〇一九・高志書院。

近年、岩手県宮古市の田鎖車堂前遺跡および釜石市の川原遺跡から「平泉セット」が確認されているようですが、それでも限定的といえます。これらの指摘は、平泉藤原氏の奥羽支配は交通の要衝を掌握しているとはいえず、かなり濃淡差があったことを意味しています。私が、奥州藤原氏とせずに「平泉藤原氏」と呼称するのは、こうした濃淡差に基づきます。



「平泉セット」の分布図 *八重樫前掲(2002)を加筆

こうした平泉権力の地域的濃淡差は、頼朝が奥羽に侵攻した「奥羽合戦」にも影響を与えます。なお、「奥羽合戦」と称される頼朝の平泉攻撃は出羽国でも展開されたため「奥羽合戦」と呼んでおきたいと思います。その経過は、七月十九日、頼朝が鎌倉を出陣すると、同月二十九日には白河関を越え、さらに八月八日の阿津賀志山の戦いが初戦となります。なお、『吾妻鏡』は同日条に「石那坂」に陣した信夫佐藤庄司（継信・忠信の父）と常陸念西（伊達氏の祖）の子が戦ったことが載っています。しかし、石那坂は福島市の南に位置していますから、阿津賀志山の戦いに先んじて石那坂の戦いがあったと思われる、『吾妻鏡』の誤認・誤記の可能性があります。

その後、八月二十二日に頼朝軍は平泉到着、九月三日、藤原泰衡が数代の郎従河田次郎に殺害され、泰衡の首級は頼朝の元へ届けられますが、頼朝はさらに進撃して九月十日には厨川柵に到着します。頼朝が鎌倉に帰着したのは十月二十四日でした。頼朝の平泉・藤原氏攻撃は、実質一か月ほどで終わったといえます。

その背景に、早い段階で平泉藤原氏を滅ぼすための準備を進めていた頼朝の軍略があったと思います。例えば、一一八九年二月、頼朝は島津庄地頭島津忠久に対し「島津庄で武力に秀でた人たちを連れて、七月十日までに関東に参着せよ」と命じています（『島津家文書』）。また、阿津賀志山麓には平泉方が構築した幅十五メートルほどの二重堀が残されています。しかし、畠山重忠は人夫八十人に鍬や鋤をあらかじめ持たせ、堀を埋め戻してすぐに攻め込んだと「吾妻鏡」にあります。頼朝は、平泉方の迎撃態勢を掌握していたのではないかと思えます。

さらに、福島県の南端、いわき市は勿来関が置かれたところですが、いわき市の飯野八幡宮の縁起には、一一八六（文治二）年七月十日に飯野八幡宮が勧請されたとあります（『飯野文書』）。飯野八幡宮が位置する好嶋郷は、後に庄園化され好嶋庄になり、頼朝が支配する関東御領に組み込まれていきます。文治二年という早い段階で、石清水八幡宮（本社）から御正体を勧請できたのも、あるいは頼朝が介在していたかもしれませぬ。

これに関連して『吾妻鏡』には、「奥州の反逆に対し、軍勢を遣わせた。海道の大將軍は千葉常胤、山道は比企藤四郎能員。ところが、東海道の岩崎の輩は、常胤の到着を待たずに先駆けを進めたいと要請してきたので、もちろん許した」とあります。『吾妻鏡』は、これを一一九〇（建久元）年正月八日のこととして載せていますが、千葉常胤が東海道の大將軍として平泉を攻撃するのは一一八九年のことですから、『吾妻鏡』の誤りといえます。頼朝の進攻に、岩崎の輩は頼朝軍に合流して平泉を攻撃する側に付いたのであり、太平洋岸を北上する東海道軍は容易に奥州に進攻できたとになります。

さらに『吾妻鏡』一一八八（文治四）年三月十七日条には、陸奥白河領（福島県白河市）は藤原信頼が知行し、のちに平重盛が知行したところですが、平家が滅びたあと、頼朝が勝手に支配していたようです。それで、「どうししましょうか」などという手紙を後白河院に送っています。いずれにせよ、白河領を頼朝が支配してしまいます。

前掲「平泉セツトの分布図」でも分かるように、南から奥羽に入るには三か所の関所があります。日本海側（鶴岡市）の鼠ヶ関、内陸部の白河関、太平洋岸の勿来関（いわき市）です。頼朝は、この三か所の関所（東北への出入口）のうち二か所を、戦いが始まる前に押さえていたわけです。

早い段階から準備を進めていた頼朝の、全国の武士と源氏との主従関係が非常に古い時期から存在し、それが頼朝の時代まで続いたとの主張は、すでに川合康さんが指摘しているように、かなり懐疑的と思われます（「奥州合戦ノート」『鎌倉幕府成立史の研究』二〇〇四・校倉書房、初出は一九八九）。

たとえば、泰衡の首級について『吾妻鏡』には、「前九年合戦の故事に倣って、泰衡の首を切って釘で額を穿ち、さらし物にした」とあります。前九年合戦では、安倍貞任が厨河柵（岩手県盛岡市）の戦いで敗れて殺されます。しかし、前九年合戦の基本史料『陸奥話記』には、貞任が殺されたとき、釘を打って晒されたなどの記載はありません。

ん。要するに、前九年合戦のできごとを捏造し、源家との主従関係の譜代性を強調したと思われる。

さらに、安芸国の葉山介宗頼は、頼朝の奥州下向に従軍しようとしたところ、駿河国で既に進発したことを聞き、そこから帰国した。そのために所領を没収され（『吾妻鏡』）、あるいは薩摩国の鹿児島郡司藤内康友は、頼朝の奥州進攻へ供奉したので所領を安堵された（『薩藩旧記』）ように、全国の武士に対して「頼朝側に付くかどうか」の最終判断を迫ったともいわれています。

平泉に攻勢をかける頼朝に対し、後白河院の具体的な行動はほとんど確認できません。院宣や宣旨を送ってはいますが、情報が容易に届かず不足していたのではないのでしょうか。非常に早い段階から平泉・藤原氏に関する情報入手し、的確な判断をした頼朝に対し、後白河院はそれができなかった可能性があるように思います。

頼朝が高階泰経に送った書状で、後白河院を「大天狗」と称したという有名な話がありますが、平泉攻撃の動きを見てみると、「大天狗は頼朝自身ではないのか」と思いたくもありません。

全ての資料を用いることができず、分かりにくいものになりましたが、一枚の折敷墨書から多くのことがわかります。現在も進められている「平泉」の考古学的な調査からは、新たな遺物・遺構がこれからも確認される可能性があります。平泉研究もまた進行中ということになります。これから新しい説が展開される可能性があります。それは野口実さんを介して発信されるものと思います。

それでは、これで終わります。ありがとうございました。

（終了）

※当日、省略した内容も加味して再編したことをお断りします。

〈キーワード〉

藤原清衡

貢馬

柳之御所遺跡

無量光院

折敷墨書